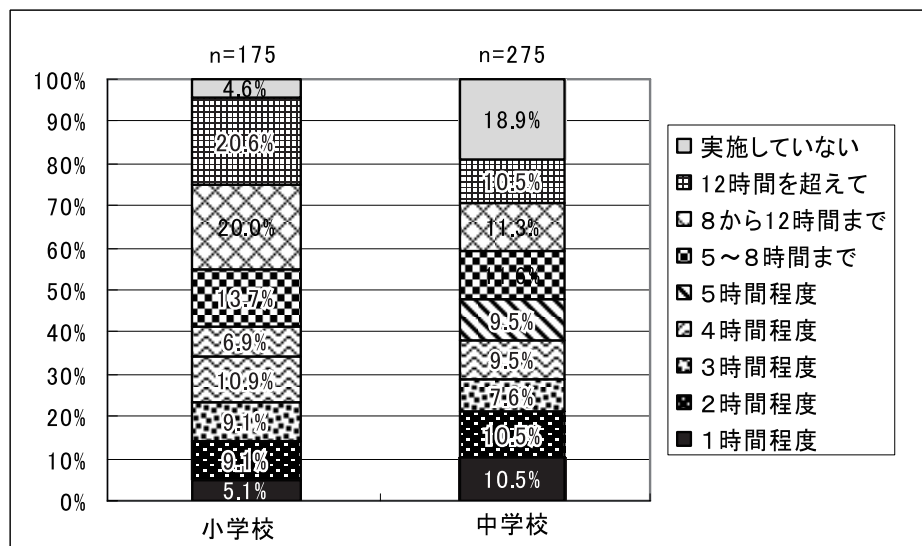


4. 知的障害特殊学級

(1) 交流及び共同学習の実施状況について

①実施状況

図Ⅲ 4－1 に、知的障害特殊学級に在籍する児童生徒の交流及び共同学習の実施状況を示した。

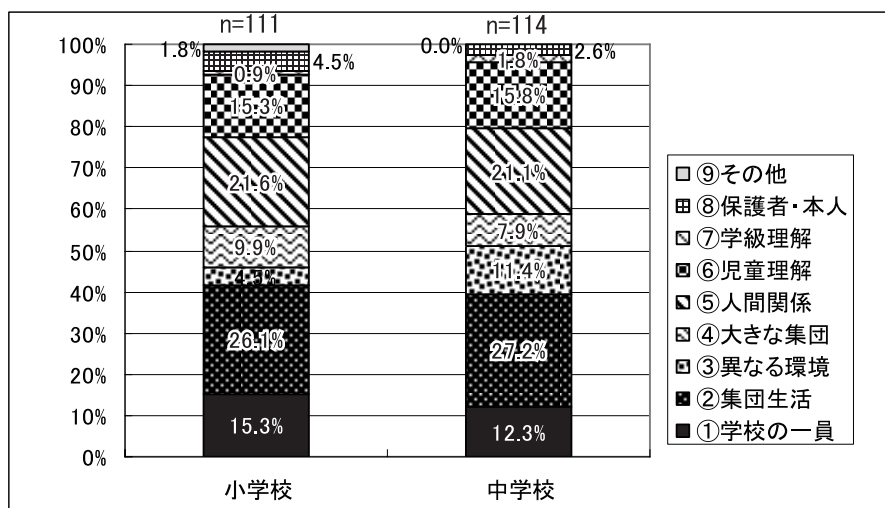


図Ⅲ 4－1 1週間あたりの実施状況

小学校では、実施していない児童が4.6%、中学校では18.9%となっている。小学校では、ほとんどの児童が交流及び共同学習を実施していると言える。最も回答が多かった順に挙げると、小学校では、20.6%の児童が12時間を超えて実施しており、次いで20.0%の児童が8～12時間まで、13.7%の児童が5～8時間実施していた。中学校では、実施時間数は児童によってバラツキがあり、各回答とも10%前後の割合を占めていた。

②目的・ねらい

図Ⅲ 4－2 に、知的障害特殊学級における交流及び共同学習の目的・ねらいについて、その他を含む10項目の選択肢の中から、特に重要と思われるものを3つ回答してもらった。

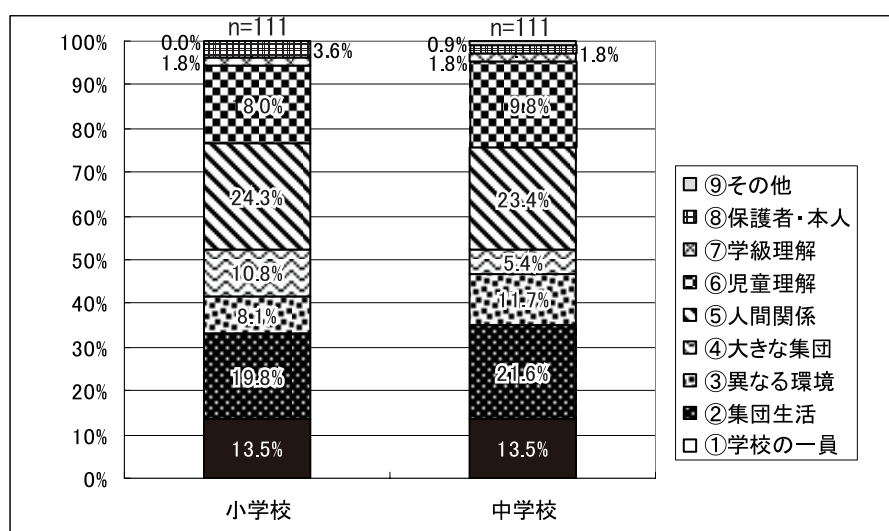


図Ⅲ 4－2 目的・ねらい

小・中学校ともに、②集団生活で社会性を培うという回答が最も多く(小学校 26.1%、中学校 27.2%)、続いて、⑤校内でのつながりや人間関係を形成する(小学校 21.6%、中学校 21.1%)、となった。その次に多かったのは、小学校では、①学校の一員であることをお互いに確認すると⑥特殊学級の児童について理解してもらう(共に 15.3%)で、中学校では、⑥特殊学級の児童について理解してもらう(15.8%)であった。このように、小学校、中学校とで似た回答傾向にあった。

③成 果

図Ⅲ 4－3 に知的障害特殊学級における交流及び共同学習の成果について示した。これは、その他を含む 10 項目の選択肢の中から、あてはまるものを 3 つ回答してもらったものをまとめたものである。



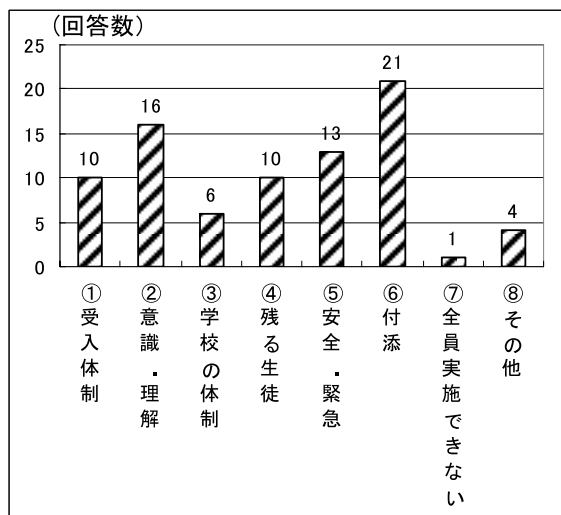
図Ⅲ 4－3 成 果

小・中学校ともに、⑤校内でのつながりや人間関係を形成できたこと、②集団生活での社会性が培われたこと、⑥特殊学級の児童生徒への理解が進んだこと、などを回答する割合が高くなっている。これは、前述の交流の目的・ねらいにおける回答とほぼ対照していた。

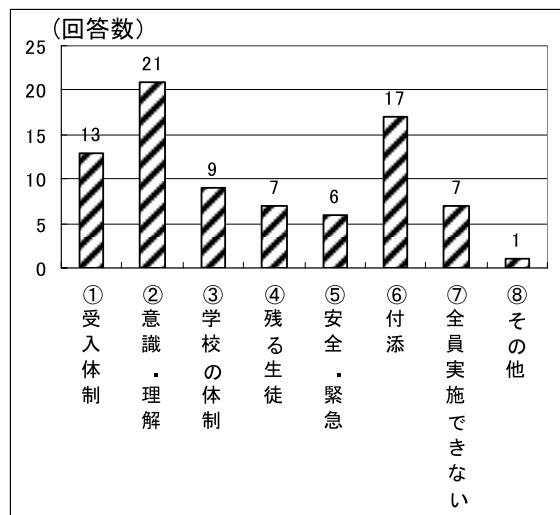
④課 題

図Ⅲ 4－4 図Ⅲ 4－5 に、知的障害特殊学級における交流及び共同学習の課題について示した。これは、その他を含む 10 項目の選択肢の中から、あてはまるものを全てを回答してもらったものである。

小学校では、最も回答の多かったものから順にあげると、⑥特殊学級担任の付き添いの問題(21 件)、②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について(16 件)、⑤安全確保・緊急対応の問題(13 件)となった。中学校では、最も回答の多かったものから順にあげると、②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について(21 件)、⑥特殊学級担任の付き添いの問題(17 件)、①交流先の学級の受け入れ体制について(13 件)となった。小・中学校ともに、交流に伴う付き添いの問題や交流先の担任や児童生徒の意識や理解の問題が多く回答されている。



図Ⅲ 4－4 小学校の問題



図Ⅲ 4－5 中学校の問題

(2) Aさんに対する配慮の実際

次の3つの条件にある児童生徒1人（以下Aさんと記す）を選び、Aさんに対する交流先での配慮の実際について記述してもらった結果をまとめた。3つの条件とは。通常の学級との交流で、教科学級の経験がある、在籍する児童生徒のうち、もっとも高学年である、障害やその程度は問わない、であった。自由記述を整理し、特徴的な回答内容を以下に抜粋して列挙する。

① Aさんに対する配慮

事前に学習内容やスケジュールを知らせるなどの個別的に行うなど障害特性に対応した配慮が挙げられている。全体への指示の後個別に指示をする等の配慮が挙げられている。また、友達とのコミュニケーションや友達からの支援に関する配慮も挙げられていた。その他、心臓への配慮など身体疾患等への配慮が挙げられている回答もあった。また、中学校では、テストや評価に対する配慮が挙げられていた。

<学習内容等に関する配慮>

- ・ 学習の内容等について、障級担任との打ち合わせをする。
- ・ 事前にどんな学習をするか確認しておく。
- ・ 同じ場で学習ができるように学習内容をかんたんに。
- ・ 実態に合わせた学習の目標を設定する。
- ・ 課題に配慮している。(黒板を写す時に一部を指示したり、別の課題を与えたり。)
- ・ 他の児童がしている教科と同じ教科をAさんにあった内容で授業できるようにしている。(PDD・自閉症)
- ・ 事前にその時間で何を学習するのか伝えたり、その時間に実施する全く同じ学習を事前に経験させる。
- ・ 活動内容及び指示事項について、事前あるいは事後に連絡を取り合い、不十分な点については特殊学級で再度指導するようにしている。
- ・ 板書を大きく書いてもらう。個人発表はなるべくしないように。
- ・ できるだけ着席していただけるように、好みの本を用意しておく。前の席の子たち

の様子をみせて、何をするのかわからせる。（PDD・自閉症）

- ・ 交流先の学級担任が、離席や活動への不参加も認める。（一斉指導中や全員遊びのとき）（PDD・自閉症）
- ・ 係活動等決める時Aさんにできるものをさせる。
- ・ 清掃、給食当番Aさんに無理がなく、一人でできるものを与える。

<指示の与え方、付添>

- ・ 協力担任が事前に知らせ、見通しを持たせる。（日程、活動の進め方など）。
- ・ 指示を与える時、絵カードを利用する。スケジュールカードを用いて見通しを持って学習に取り組めるようにする。
- ・ ことばの指示だけでは不十分であるとき、指示を書いたメモを利用する。その際漢字は1年生程度のものだけを使用。（PDD・自閉症）
- ・ 視覚からの情報収集能力がとくに優れているので紙・黒板などに書いて伝えるようにしている。（PDD・自閉症）
- ・ プリントなどで読めない漢字があれば読んで教える（障害児学級の担任も参加しているとき）
- ・ 教師がAさんに理解できるように分かりやすい言葉で指示する。
- ・ 担任や、T・Tの先生が常に声かけをする。
- ・ ゆっくりと話したり、なるべく短い言葉で、具体的に指示をだすよう心がけている。
- ・ わかりにくい指示は個別にもう1度伝える。
- ・ 一斉指導後、個別指導をする。又、作業は、スモールステップで指導する。
- ・ 個別に指示を与えられる時には、個別で、それ以外の場合には、失敗も大目にみてもらう。
- ・ 全体への指示の後、その児童が行動できるかどうかをまって、できなかったら個別に指示を与えるか、まわりの児童に支援するように気づかせている。
- ・ 全体への指示のあと、個別に確認をし、理解していない場合は、指示をする。
- ・ 特殊学級担任が常にそばにいて、全体指導をわかりやすく言い換えたり、課題を本人に適したものに変更したり、というような支援をおこなう。
- ・ 特殊学級担任と一緒に活動しながら、学習のルールを学んでいけるようにする。
- ・ 交流の担任が、常にそばにいる。（PDD・自閉症）
- ・ 特学の担任が全ての時間にT・T体制で指導に加わる。（情緒障害）
- ・ 算数はTTであるので、単元によって先生方が変わるので本児について講師の先生が付き添いをしている。（声かけが必要な時のみする。）（場面かん黙）
- ・ 交流学級担任の近くに席を置き、常に本児の様子を見ながら指示を与えている。障害児学級担任もできるかぎり入り込んで指導している。（PDD・自閉症）
- ・ 音楽の交流では、個別に楽器を与えるなど、本人の得意なこと、できることを中心に指示を与えるようにしている。
- ・ できたことを、具体的にほめる。

<友達との関係に関する配慮>

- ・ 友達とのコミュニケーション作りが円滑に進むように配慮している。

- ・ 友だちの名前がわかるように友だちの写真と名前がセットになった写真カードを利用している。
- ・ できる限り、他の児童と共に活動できるよう働きかけるが、難しい時は個別に話をしたり補助したりする。
- ・ 障害の特性、接し方を子どもたちに理解。（PDD・自閉症）
- ・ グループ編成時にAさんの事を気をつけてくれる子を同グループに。（PDD・自閉症）

＜身体疾患等への配慮＞

- ・ 心臓への配慮。（ファロー四徴症）
- ・ 不意に発作を起こす可能性が高いので常に教師がそばにいる必要がある。（てんかん）
- ・ できる限り、特殊学級担任が付きそう。（ソトス症候群）
- ・ 過度な運動をしない。

＜その他＞

- ・ 掃除や交流の時間には、交流先の児童が迎えに来てくれる。
- ・ 登下校をいっしょにしている生徒がいる。（ADHD（疑い含む））
- ・ 提出物については教科担任又は特殊学級担任が別な時間に一緒に仕上げている
- ・ Aさんの実態に合った評価基準の設定。（ダンディ・ウォーカー症（小脳欠損症）側弯症、難聴、視覚障害）
- ・ テストの問題用紙にルビ打ちしている。
- ・ 注意獲得のために大きな声を出したり、わかっていることを何度も言ったりするのでその行動をおこす前に、よく話しておく。
- ・ 本人の気持ち（何がしたいのか、どうしたいのかなど）を確認する。（PDD・自閉症）
- ・ 連絡ノートを利用。
- ・ 学級内での言動に偏見、差別がないよう配慮している。

②環境・設備面での配慮

座席の場所に対する配慮が多く回答されていた。

- ・ 先生の指導がしっかり出来るように座席に常に前にしている。
- ・ 担任の席を必要なら作る。本人の席は常時交流学級にある。
- ・ 座席はめがねをかけて板書が見えるところにしている。
- ・ 本人の希望する座席にする。
- ・ 入りやすい（出やすい）場所に席をしてもらう。
- ・ 交流先の学級では、担任の個別の指示がすぐに入れられるよう座席を最前列にしている。
- ・ 座席を前の方か、個別指導がしやすい席にしている。
- ・ 学習内容によって、個別に言葉を掛けられるよう、座席を教師の近くにする。
- ・ 特殊学級担任が支援を入れやすいように座席は、中央ではなく、左右の列にする。
- ・ 障害児学級担任が教室内でもサポートできるように座席の位置を配慮している。

- ・ 持ち物等は、担任同志が連絡し合い、忘れないよう配慮している。
- ・ 座席を前にするとともに、なるべく話しやすい（親しい）友達のとなりにするよう、配慮している。
- ・ 座席はいちばん前（仲のよい友達にめんどろをみてもらえるよう）にしている。
- ・ Aさんのことを理解してくれている安心できる友だちを席の近くにしている。
- ・ 協力担任が、班やグループづくり、席替などで、Aさんとの関わりができる子どもを近くに作る。（PDD・自閉症）
- ・ Aさんが見渡たす視野が広い方がよいので、座席を後ろにしている。まわりの座席に、やさしい子を配置している。（PDD・自閉症）
- ・ いろいろな児童と触れ合うことができるように、班員や座席が固定しないよう配慮している。
- ・ 自分の参加する場所がわかり落ち着いて学習に取り組めるよう目印などで場所を明確にする。
- ・ 特にないが、いろいろな子ども達と交わるための座席の配慮はしている。（その場に応じた対応）
- ・ 特になし。通常の学級児童と同じにし、平等意識を尊重している。（不公平を排除）
- ・ 机とロッカーを交流級の教室にも備える（PDD・自閉症）
- ・ 他の児童の様子が見えるように座席を一番後ろにしている。（PDD・自閉症）
- ・ コミュニケーションボードをすぐそばに置く。行動写真カードは自分で選べるようにしている。（PDD・自閉症）
- ・ 危険なものがそばにないような場所を選んで座らせる。発作を起こすことがあるので体育館の中にいるときは最後尾に座らせる。（てんかん）
- ・ 交流学級の担任は、てんかん発作も考えられるため、野外活動や、体育等では、本人から目をはなさないようにしている。（てんかん）
- ・ たくさんの友達と関わるができるように、席がえ等は、みんなと同じように行う。（ADHD）
- ・ 端の方の座席が落ち着くので、窓側に座席を配置する。（PDD・自閉症）
- ・ 見通しのもてないことに対する不安感が大きいので、環境の構造化を図り、その場所へ行けば何をすればよいのかわかるようにしている。（PDD・自閉症）
- ・ 場面によって黙り込んでしまうため、交流学級の担任から声をかけるようにしている。

③集団参加への配慮

交流先の学級の児童にAさんの障害や特性について説明し理解を得ること、個々の児童生徒にAさんへの関わり方を知らせ、配慮を求めること、理解を示す児童とのグループでの活動を工夫すること、係の仕事や当番を交流学級でもわりあててもらえるなどが挙げられている。また、担任にAさんへの接し方について説明し、配慮をお願いすることなどが挙げられていた。

＜Aさんの障害や特性について理解してもらう＞

- ・ 交流先の児童にAさんの様子を伝える。Aさんが1人でできないものは教師がさりげなく支援し、温かい学級の受け入れ体制作りに日頃から心がける。
 - ・ 交流先の学年、学級担任との障害についての話し合い。
 - ・ 交流先の生徒に、交流級の担任をつうじて、Aさんの特性を伝えておく
 - ・ 特殊学級担当が付き添い、周囲の生徒に、Aさんの特性、支援の方法等を伝える。又は、直接担任が支援する。
 - ・ 学年の始めに保護者の方々に、AさんについてAさんの保護者が学年懇談会に出席して話をしている。
 - ・ 保護者と交流先の学級担任との面談。交流先の生徒にAさんの特性を話す。
 - ・ 交流学級の児童担任、専科（音楽）、算数のT・Tの先生方にAさんの特性を事前に伝えておく。〈算数の単元の中で非常に難しい場合には、様子を見ることもある〉（PDD・自閉症）
 - ・ 児童の特性や実態を伝えている。今後個別教育計画などを提示しながら指導面での配慮をお願いする。また交流先の教師の意見を取り入れながらの立案も考えられるだろう。
 - ・ 交流先の児童にAさんの特性や、関わり合いの中で困ったときの対応の仕方を伝えておく。
 - ・ 朝の会で、特別に「〇〇ちゃんタイム」を設けてもらいクラスの友達に向けて交流先の児童と話す機会をなるべくもち、Aさんの特性を理解してもらう。
 - ・ 該当の学年内の生徒に理解をしてもらうために、学年始めに生徒への理解をお願いし、交流学級へは、自己紹介をして本人をしっかり知ってもらった。
 - ・ 交流担任の先生が、学級の生徒達にAさんの障害の特性やAさんの性格、声かけのコツなどを話してくれた。トラブルがある度に（よくある）ていねいにどうしてそうなったかとか、どうすべきかも伝えてくれている。（PDD・自閉症）
 - ・ 通常学級の生徒にはAさんの個性として認知させている。（情緒障害）
 - ・ 全職員での研修時に、生徒の特性、支援、配慮事項を確認共通理解を図っておく。
- ＜交流先の児童に対する働きかけなど＞
- ・ 学級開きの時期にあいさつに行き、担任から説明する。
 - ・ 年度初めに、交流学級担任より生徒にAさんのことも含め交流の意義等について話してもらう（Aさんの不在時）
 - ・ Aさんが孤立することがないように、声かけ等の配慮ができるように通常学級の児童に、指示している。
 - ・ 出来ること、出来ないことの確認を学級児童全員で行い、過大な要求にならないように留意している。
 - ・ 交流先の児童にAさんのできるようになったりがんばったりしたことを、交流学級の担任が授業中、その場で、紹介し、認め合う目を育てている。
 - ・ 全学年に本人を紹介。特に同学年、同クラスには、配慮してほしいことを伝えておく。本人のことを小学生の時からよく理解している二人の生徒に交流学習の時に助けてくれるように頼んでおく。
 - ・ 交流学級で学習等に参加する時には、不安や緊張感なく教室に入り、授業に参加

できるように、交流学級の児童に迎えに来てもらう。また送りもしてもらう。

- ・ 全体に養護学級の位置づけについて指導し、道徳の時間に「障害にある人とともに生きる」について学習する時間を取った。(てんかん)
- ・ 相手の立場で物言を考えることの大切さを継続的に指導している。
- ・ 同級生の声かけを積極的にすすめている。
- ・ Aさんを含め特学のことを通信等で知らせる。
- ・ 担任や交流担任からの協力呼び掛け(身体障害、心臓疾患)
- ・ 必要があれば、生徒に声をかけ誘ってもらったり、配慮をお願いしたりする。
- ・ 交流学級全員の生徒が理解してくれて、いろいろと助けてくれている。
- ・ 具体的に声をかけてくれる生徒に事前に場面を想定してお願いしておく。

<Aさんに対する働きかけ>

- ・ 事前にすることなどを伝えておき、模擬練習などをする。・ 集団にAさんがいいことなどを伝えていく。(PDD・自閉症)
- ・ 集団活動の中で孤立しないような配慮。
- ・ 担任がグループにいっしょに入り、声かけする。
- ・ 校外学習・体育(運動会の練習)は、障害児学級担任がつき添う。
- ・ 持って来る物や、服装については口頭でなくプリントを使って確認する。
- ・ 何かトラブルが起きた時に本人に人間関係の処理の仕方に関して指導する。

<交流先の学級への貢献>

- ・ 係の仕事や当番を交流学級でもわりあててもらい、日直、給食当番など、できそうな仕事を行えるよう配慮してもらっている。

<活動内容の確認や配慮など>

- ・ Aさんの活躍の場を保障できるよう、事前に確認しておく。
- ・ 小規模校で小さい頃からつながっている集団なので、Aさんのことは、生徒もよく理解している。その集団参加への配慮としては、交流・共同学習に対して不安感をもたないように、活動内容を自前につたえ、見通しがもてるようにしている。
- ・ 体育大会や球技大会などは特別ルールをとり入れている。
- ・ 活動内容で無理な点もあるので、事前の話し合いは必ずするようにしている。

<班編制等への配慮>

- ・ 世話をしてくれる子どもたちをまわりにおく。
- ・ 理解を示す児童と、集団行動ができるようにしている。
- ・ Aさんについて理解している児童にサポートしてもらう。
- ・ リーダー的な生徒と同じ班にする。(PDD・自閉症)
- ・ 話せる相手がいる班にもらっている。(ADHD(疑い含む))
- ・ 困った時に支援をしてくれる生徒を作っておくようにする。(音楽なら音楽系の生徒というように。)(LD傾向)
- ・ 教科以外にも給食での交流も続け、班にも位置づける。

<その他>

- ・ 自分から集団へも働きかけることができるので特になし。
- ・ 学年が上がるにつれて、自分の状況は自分で伝えられるようになったので、とり

たてて配慮する必要は少なくなってきた。

- ・ 1校の小学校より、ほとんど中学校へ上がるのでAさんのことについては教師以上に理解してくれている。普段より、自然に配慮できている。
- ・ 小学生の時から級の友が大多数を占めるので特別なし。
- ・ 親学級の担任とも連絡を密にするようにしている。
- ・ 受け入れ学級に連絡し、担任と密に連絡をとった

④その他の配慮

- ・ ねらいがちがうのでみんなと一緒になくてよいという意識でのぞむ。
- ・ 特定の決った授業時間だけでなく、本児のとりくめそうな活動的な授業やイベントには参加している。
- ・ Aさんへの理解を深めるため（学級の一員としての認識を高めるため）交流学級で過ごす時を大切にし、ありのままのAさん及び支援する教師の姿を他の児童に見せる。
- ・ 廊下や清掃時など、見かけたら言葉かけするようにしている。
- ・ 必要があればメモ書きや、教室訪問をしてくれて、知らせてくれる。
- ・ 交流学級では、みんなと同じことをしようと精いっぱいがんばっている。障害児学級に戻ってくると、その疲れが出るのかふーっとため息をつき、甘えることがある。
- ・ 現状では、6年の算数、音楽}に前向きに学習しようとしている。（PDD・自閉症）
- ・ 単学級で、保育園、1年生までを共にしてきているため、Aさんの特性について、まわりの児童がよく心得ていて、必要な手助けがわりあいよくできている。（てんかん）
- ・ 嫌なことがあったり、落ち着きたい時に自分一人で居られる場所を提供する。（PDD・自閉症）
- ・ 集会や行事の時など、養護学級担任からもクラスの生徒に話をしている。
- ・ Aさん自身、友達がいなと言う。いつも、ひとりで車の運転のまねをしたり時代劇のたてのまねをしたりしている。
- ・ 担任だけでなく、面倒を見てくれる生徒にもAさんについてよく理解してもらえるようにしている。
- ・ 交流級の担任や教科担任にAさんの特性を伝え、生徒達同志でも支援してもらえようグループ等で配慮をしてもらっている。また授業の様子などを聞きながら、Aさんの支援について共に考えている。
- ・ 交流学級へ給食を食べに行っているが、必ずAさんに毎日配膳の手伝いをさせてもらっている。（学級への貢献）

（涌井 恵）